

- 「一国の盛衰は半導体にあり」 牧本次生 著 の p.96 掲載の一節、
「ICの発明者はキルビーかノイズか？」からの引用文です。

この後10年にわたって特許権の帰属をめぐる法廷論争が繰り広げられた。激しい係争を経た後で、TI社とFairchild社のTopによる会談において、ICの特許はKilbyとNoyceが共有する形となって決着をみたのである。

Kilby は2000年にノーベル物理賞を受賞したが、その時すでに Noyce は他界していたため、Kilby の単独受賞になったものと思われる。

「ICについては Noyce も類似のアイデアを持ち、実現手段も考案していた」と述べていることから、ノーベル賞についても二人で分かち合いたいという気持ちがあったのかも知れない。

この発明からわれわれが学ぶことは、半導体における「突然変異」は必ずしも大勢の人数をかけた研究から生じるものではなく、問題を深く掘り下げる能力を持つ個人の洞察力が何よりも必要であることを示唆している点だと思う。